

老人による文化伝承と次世代育成

－カンボジア・アンコール地域の村落において－

上智大学アジア文化研究所客員研究員 遠藤宣雄

はじめに

これは、カンボジアにおける老人の活動を紹介したものである。村でいう老人とは大体50歳前後である。その年になると女も男も家族のために働くことから社会のために働くことに「生き方」を変えるのである。カンボジアは遺跡観光がはやっているが遺跡だけの国ではない。日本があるいは日本人が失った古き良き時代の社会秩序や自然に対する感性や人としての美徳を失わずに持っている。では、我々はカンボジアの社会、あるいは村落の老人から何を学ぶべきか。

村の生活について言えば、伝統的に祖父母、両親、そして子供の「3世代」が一緒に住んでいる。教10年前までは日本も3世代共生は一般的であったが、核家族化が進んだ今日3世代共生は極めて珍しくなった。カンボジアのアンコール地域の村でも、個々の家庭を見ればさまざまであるが村全体を見れば3世代が一緒に住んでいる。3世代が一緒に生活し活動しているか否かは、その活動や生活が伝承され発展するかどうかを見分けるリトマス試験紙のようなものである。50歳になると辛い田畑の仕事は子供夫婦に譲って、老人は隠居して家を守ったり孫の世話をする。その一方、寺院に出入りする機会が多くなり、仏教の教えに従って人のため社会のために尽くす生き方に転換する。そういうことが出来る人は社会的に幸せな人といわれている。個人的に見ても、そういう人は常識があり、知識も経験も豊富でアチャ、とかイエイ、ターと言って尊敬されている。カンボジアでは人は50歳ともなれば人生の先生と呼ばれるに相応しい人になる。これがカンボジアで言われる「老人」の一般的なイメージである。そういう老人を中心に村の伝統的な文化、例えば仏教的な冠婚葬祭、農具や箆や家具類の作り方を若者に伝承する仕組みを作ることによって、年々消えつつある古きよき時代の文化を保存しようというのが今から紹介する老人会活動である。

老人会活動は国連ボランティア（United Nations volunteers Program, UNV）の地域発展プロジェクト（構成11人）のうち3人の文化班の活動として行われた。他の8人は環境班、組織班、貯蓄班、米銀行班、収入源確保班などの活動を行っていた。老人会活動の提案者である私は文化班に所属し、1999年から2001年までの2年間この活動に従事した。1994年からUNVが活動していた村は11あって、その中でやる気を示した3村が老人会設立の候補にあげられ、最も熱意を示したコック・トノウト村（Kok Thnout）で本格的な活動が開始された。

老人で読み書きが出来ない人は少なくない。しかしそういう人でも、伝統文化の保存や次世代育成の必要性についてはしっかりした考えを持っている。それを知って私の老人に対する考えが変わった。社会において老人は社会的文化的発展のために立派な役割りを担っている。要するに老人抜きで村の伝統文化の保存も伝承も出来ないと思うのである。

1. 村を観察する視座

私がいつ村に入り、村人に関する考えがどのような変化したかということから話をはじめよう。それは1994年3月、北スラ・スラン村の前を歩いているときのことであった。道路沿いで子供たち3、4人が夢中になってゴム草履を的に向かって投げて遊んでいた。午

前 10 時ごろであった。遊びに興じている子供のそばには幼い子供が 2 人いた。遊んでいたのは、弟や妹の世話をするため行きたくても学校に行かないで親の手伝いをしている子供たちである。

この村は調査団がカンボジア政府から要請を受けて保存修復の調査を行っているバンテアイ・クデイ遺跡のすぐそばにある。したがってその気になればいつでも村を訪問することができた。しかし、村は当面は遺跡調査に必要な作業員を動員するところであって、異邦人が興味本位で村人の生活の場に入るのは失礼だと思ってあえて村には入らなかった。ところが、そのときばかりは心的状態が違っていた。遺跡ばかり調査して遺跡の側で生活している村人に関心を持たないのは文化に携わる者として好ましいことではないと思ひ、村を訪問することにしたのである。

村に一步足を踏み入れるためには村人に対して挨拶が必要だ。私は大人にも子供にも会った人には帽子をとって「こんにちは」と挨拶をした。そういう私を見て上半身はだかの子供たちはきゅきゅと笑った。日陰で農具の手入れをしていた老人は頭に巻いていた伝統的な布のクロマーをとって微笑んでくれた。庭を掃いていたお婆さんは、おはぐろを施したような真っ黒な歯を見せながら、「お元気ですか」といつてくれた。子供たちの衣服はつぎはぎだらけ、家は椰子の葉と板張りの質素なものであったが、村人の眼は好意的であった。子供の無邪気な眼差しや、老人の礼儀正しい姿に接して村人に親しみを感じた。

私はやや高ぶった気持ちを静めるためにいったん村を出て、道路を横切つてスラ・スランという他の堤の水陰に腰を下ろした。水面を渡ってきた風が頬に心地よかった。私は、いま村で見てきたことや感じたことを思い返した。

――樹本に囲まれて住んでいる村の老人たちは樹木や薬草についての知識が豊富であるに違いない。昔から伝わった伝統や風俗習慣は、実際は生活のどこに残っているのだろう。幼い子供と老人の姿は見掛けたが、若者の姿が少なかったのはなぜだろう。老人がはつらつとしていたがそれはなぜだろう。村人が着ている衣服や家のたたずまいは質素なのに貧しいという感じを受けなかった、むしろ人間的に温かいものを感じたが、それはなぜだろう、ということであった。――

貧しくとも人間はこうありたいと思うことを、老人も子供も備え持っているように感じた。そもそも人間社会とはどういう姿であることが望ましいのだろう。子供がいて老人がいて壮年がいる。男もいて女もいる。それぞれがどういう関係になっていたらいいのだろう。その場合特に気になるのは老人と孫との関係である。村を 1 回訪問してもたいしたこととは分からないから、出来るだけ何回も村を訪問し老人と孫との関係、村人の気質、生活様式などを理解しようと思った。

2. アンコール歴史考古公園

北スラ・スラン村は、国家と国民のアイデンティティであるアンコール歴史考古公園の中にある。それは、古都シェムリアップ市から北東 9 km、有名なアンコール・トム遺跡の東 3 km の地点にある。訪問当時、村の形は長方形で東西 650m、南北 120m、人口 580 人、民家 130 軒というこじんまりした農村であった。村は遺跡と森林に囲まれている。ちなみに村の東側は灌木の林になっていて、北には水田が広がっている。西側はロハール村と隣り合っていて、南には自動車が行来する舗装道路が走っている。その道路の直ぐ南側がスラ・スラン池である。池は、東西 700m、南北 300m の整った長方形をしていて、12

世紀末カンボジアの英雄ジャヤツアルマン7世王が沐浴場として建造したものである。村の南西の角には高さ2m、東西730m、南北490mのラテライトの塀で囲まれたバンテアイ・クデイ遺跡があり、これも王が建立した仏教寺院である。このように、アンコール地域には9世紀から13世紀にかけて建造された遺跡があちこちに存在する。公園は1992年に遡って世界文化遺産に登録され、政府機関であるアンコール地域保護管理機構（アプサラ機構）が単に遺跡保護だけではなく遺跡を取り巻く自然環境の保存や古い村落に残る伝統文化の維持管理を行っている。でも遺跡はなぜ保存されなければならないのだろうか。保存してどうするというのか。どれもみな保存しなければならないのか。そうしたら何万年か後の子孫は遺跡に囲まれて、何も新しいことが出来ないのではないのか。本稿ではそこまでは考えないで話しを進めようと思う。

シエムリアップ州10000k㎡は全体が保護地域に指定されていて、保護の種類はゾーン1から5の5段階に分かれている。そのうち大小100以上の遺跡が存在する400k㎡の地域が最も重要な遺跡保護地域であり、そこがゾーン1と2になっている。しかしそこは単に遺跡が存在するだけでなく、北スラ・スラン村があるように2000年末の時点では約80の村があり80000人の人が住んでいた。このように、アンコール歴史考古公園は住民が遺跡や森林と共存し共生している広大な「生活の場」になっている。ところが、年々人目が増加し他州からも移入者が来て人口が増加し、公園の魅力である住民・遺跡・森林の調和をいかに保つかがアプサラ機構の大きな課題になってきた。

1987年、アンコール遺跡の保存と活用のために構築された「遺跡エンジニアリング」¹の考えは1993年からカンボジア政府に採用された。その考えとは、①遺跡を守るという理由で公園から住民を追い出さない、②遺跡は住民の協力を得て保存する、③遺跡や村落を取り巻く森林を守り、遺跡・住民・森林の共存共生が醸し出す魅力を保つべしというものである。この考えは、1995年に制定された法律²によって具体化され、ゾーン1は原則的には居住地区ではなくなった。建前上はそうであるが政府は今まで住んでいた住民にゾーン1から立ち退きを要求してはいない。しかしゾーン1、2では新しく土地を開拓出来なくなり、許可なく発掘も出来なくなり、樹木の伐採も出来なくなった。ゾーン2は居住が許されているがアプサラ機構の許可が必要になった。

このように住民は法律によって伝統的な生活様式を維持することを要求されている一方、今まで樹木からランプの燃料や木舟に塗る樹脂を採ることは禁止され、薪を採ることも環濠で細々と釣りをすることも禁止されるようになった。規則は規則として守らなくてはならないとすると、こういう伝統的な生活の維持や変更は、影響力を持っている老人が率先して実施しなければならない。でも老人の得意なことは変更ではなく伝統の維持や伝承である。したがって老人を中心とした村の生活改善は別の機会に譲り、ここでは消えつつある伝統的な生活様式や古き良き慣習を保存し次世代に伝承するという老人の社会的な役割について述べる。では、そういう伝統文化の伝承は村ではどのように行われているのか。私は村の古き良き慣習の次世代への伝承に注目しながら、もう一度北スラ・スラン村を観察することにした。

3. 村の雰囲気

北スラ・スラン村は舗装道路に沿って東西650mある。その道路から村には直角に25、

¹ 遠藤宣雄『遺跡エンジニアリングの方法』、鹿島出版会、2001年9月10日。

² Royal Decree establishing Protected Cultural Zones in the Siem Reap/Angkor Region and Guidelines for their Management, 28 May 1994.

6本の小道がある。村に入る時はそのどれかを選んで入ればよいのだから入ること自体は簡単である。でもいったん入ったら樹木が多く家も小道も入り組んでいて来た道を見失う。家は高床式になっているが、それは土に住む霊から家を守るためとか害虫や小動物から家人を守るためだと言われている。壁は板張りか椰子の葉で出来ていて、屋根は椰子の葉、板、とたん、かわらなどで覆われている。これらの屋根材の違いは貧富を表している。床下は人の背丈ぐらいの高さがあり、農具や薪などの置き場になっていて、鶏小屋や作業場としても使われている。

村長の家に挨拶に行ったら上がるように言われ、凶らずも伝統的な家の内部を見る機会を得た。靴を脱いで、木製のはしご段を登りながら数えたら5段あった。隣の家を見たらはしごは7段その先の家は5段でいずれも奇数である。カンボジアでは奇数は縁起がいい数字なのだ。部屋の中を見たら12畳ぐらいの部屋一間であった。床は板張りで、板と板の間は1cmぐらい隙間があった。風を入れて涼しくするためである。夜は蚊も入ってくるから就寝のときは蚊帳を吊る。村長は片隅に丸めてあったマットをくるくると広げてすすめてくれた。奥さんは、ガラスのコップに熱いお茶と瀬戸物の皿に直径5cm厚さ1cmの茶色の円盤形の菓子を入れて出してくれた。これは、椰子ジュースを煮詰めて造った自家製の伝統的な砂糖菓子で、乾季の客人に対する最高のもてなしである。三方の板壁には1つずつ窓があり、用心のために縦に7、8本の鉄製のサンがある。部屋には押入れがなくタンスのような家具もない。天井板も電灯もない。柱のところに缶詰の空き缶で作った煤けたランプが1つ置いてある。隅の方には七輪と小さな水がめがあって、ヤカンからは湯気が立っていた。

村長は日の出前に起きて高さ20mの何本かのパーム椰子に登ってジュースを採る。これは危険な仕事で村でこの仕事が出来人は10人前後である。パーム椰子は紀元前後南インドから伝わってきたそうで、カンボジアの田園風景を特徴づけている。7、8本の竹の筒に入ったジュースを採ってきたら家人は直ぐ大きな鋳物製の鍋で煮詰めて水あめを造る。さらに煮詰めると目の前に出されたような砂糖菓子が出来る。しかし、ジュースから菓子が出来るまでには薪が7m³も必要である。火力があつて火もちが良い薪は値段が高く砂糖を売っても大した儲けにならない。乾季の11月から4月末まで、夕方木のテッペンに仕掛けた竹筒を翌朝取り外しては砂糖を作る。村長は午前中11時ごろまで働いて戻ってきて、大きな甕に汲み置きしてある水で汗を流し食事をすませてから仮眠をとる。やや日が傾く午後4時ごろ起きて、また何本かの椰子の木に登って明日のジュースをとるための竹筒の仕掛けをして日没後帰宅する。

昼間、両親が田畑に行ったりシェムリアップ市に行商に行ったりして留守の家では、女の子が家事をするし、子守をするし、留守番もする。男の子は5、6頭の牛を草がある場所につれて行ったり、牛の健康状態を気遣ったり、牛の体についた蟻を指でつまんで取り除いたりして可愛がっている。こうして村の子供は、学校に入るまでは家事を手伝ったり老人が働く姿を見ながら礼儀作法、伝統儀式、風俗習慣などを自学自習する。

老人は母屋と目と鼻の先で三畳ぐらいの広さの離れに住んでいる。危ないから階段はつけない。せいぜい床下80cmぐらいの高さで、縁側に腰掛けてぐるりと向きを変えると家に入ることが出来る。容姿が整っていて上品で礼儀正しいというのが村の老人の印象である。庭は箒で掃き清められていて、ミルクィー・フルーツやバナナの木が日陰をつくっている。その日陰で休んでいる黒い親豚の巨体に12頭の子豚が群がって乳を飲んでいる。その側を歩いていたらある家の庭に出た。そこには裸の1、2歳の弟を抱いた7、8歳の女の子がいた。となりの家を見たらドアは閉まっていたが中には8、9歳の女の子がいて窓

から顔を出した。留守番をしているのだ。遊びたい盛りの子供たちが遊ばないで、あるいは学校に行かないで親を助け弟や妹の世話をしている。おそらく祖父母がいない家の子供なのだろう。そういう家が 10 軒のうち 2、3 軒はある。庭の端には直径 2 m ほどの露天掘りの井戸がある。覗いたら水面は 2、3 m 下にあって水は白く濁っていた。私は村人の生活は苦労があるだろうなと思った。

家の中を覗いても質素で筆筒や押入れなどが無い。寝室はカーテンで仕切られていて、隅の方に七輪と中型の水甕など生活に必要な物が置かれている。洗濯、水汲み、薪とり、炊事などの家事手伝いをしながら子供たちは忍耐力や、思いやりの心や、強い意志力や生きていく要領を身につける。肝腎なことは、人間には知識や技術の練磨と精神や情緒の鍛錬が必要だということだ。村の子供がしっかりしているのは子供の頃から家事を行いながら祖父母の仕草を観察し、我慢しながら仕事をし、兄弟で助け合い、自分の役割を遣りこなしているからである。人間は苦しみ辛い思いをしながら、それらに耐えたり乗り越えたりする過程で強くなりキチンとした人間に育つのだ。満ち足りた生活を享受し何の苦労もない生活を楽しみながら、すなわち神経がたるんだ状態では精神を集中させなければ出来ない質のいい仕事は出来ないし、そういう仕事が出来る人間に育つ筈はない。

4. 老人会の発想

ここではなぜ老人会の発想が生まれたかということ述べる。

それは、上に述べたように村で老人や子供の生活を観察した結果、子供は学校に上がるまでは老人と過ごす時間が多いということ、しかし老人がいる家といない家があり子供の教育上差が大きいこと、にもかかわらず老人は伝統文化の継承や次世代育成を組織的には行っていないことに気づいたからである。この気づきは自分が老人になって村の老人にも、目が向くようになったことからくるようだ。人には年齢に合った目線が生まれ、その目線が気づきを育み、問題意識を持たせプロジェクトを形成させるのだ。伝統的な礼儀作法や風俗習慣、あるいは手工芸品の製作技術や薬草の知識、さらに伝統儀式や伝統芸能の知識や技術は老人に付随して存在している。したがってそれらは老人が居なくなれば自動的に消滅する。これらを残そうと思ったら早急に老人から聞き出し、記録し、本に纏め、伝承するという一連の活動が必要である。

カンボジアでは、人は年を取ると賢くなると思われている。村では確かに老人はイエイ、ターと言って尊敬されていて若者への影響力が強い。イエイ (yiey) は祖母を、ター (ta) は祖父を意味する。農村では、確かに子供はイエイ、ターの経験や助言を聞きイエイ、ターに見守られながら成長している。イエイ、ターが孫と生活するということは、イエイ、ターの側から言えば文化が伝承され次世代が育成されるということになる。アンコール地域の村のようにまだ伝統的な生活様式が続いている所では、一人前の大人になるためには学校で読み書き算数を学ぶだけでは足りず、生活に直結した多くの知識や技術や知恵を体験し学ぶことが必要である。その中には、すでに触れたように礼儀作法、風俗習慣、薬草、仏教、伝統芸能、伝統儀式、土着信仰などがある。例えば、雨季になっても雨が降らない時は田植えが出来ないから雨乞いの儀式が行われる。家の入り口を西につけると災いが起こると信じられているので西にはつけない習慣があり、これも守られている。祖先の霊は崇拝されていてお盆には寺院に霊を招いて供養されている。そのとき孫がいる人は霊が喜ぶというのでイエイは孫の手を引いて寺に行く。祖先の霊が寺を間違えて別の寺に行く場合があると考えると、最低 7 つの寺を訪ね歩く人もいる。村人は精霊を信じていて 1 年に 1 度精霊を励まし、次の年村を災いから守ってもらうために儀式 (ラン・ネアクタ) を

行う。こういう伝統や慣習は僧侶ではなくアチャやイエイ、ターによって企画され、準備され、実施される。子供たちはアチャやイエイ、ターが行う動作を見て学ぶ。したがって、子供にとってイエイ、ターは生活の先生である。3世代が共生しているため現在のところ村の伝統を伝承するには以下に述べる老人会活動は理に適っている。しかし、世の成り行きで伝統や風俗習慣は変わらざるを得ない。新しい価値観を受け入れることも必要である。古い時代の風俗習慣にはその時代の知恵があり時代の精神や誇りや英知が内在しているが、新しい文化にも科学的合理性や利便性が含まれているからである。例えば、ターは森や河や水の大切さをよく知っているしこれらを大切に扱う。イエイは病気や崇りや仏教の教えに詳しいし家畜や家禽の習性をよく知っている。こういう、古き良き時代の経験や技術や知恵の上に科学的な知識を付加すればよりよい文化を築くことが出来る。したがって、人生の場数を踏んできたイエイ、ターの経験や技術や知恵は次世代にとって宝であり、イエイ、ターにはそれらを集集し、記録し、伝承する社会的な役割がある。イエイ、ターによって家族や親戚を対象に行われている役割を村全体に拡大しようと思えば、イエイ、ターを組織して「老人会」をつくり、伝承活動を組織的かつ計画的に行う必要がある。

アンコール地域においては遺跡の保存も無形の伝統文化の保存も大切である。無形文化のほうはイエイ、ターの記憶の中に保存されているからイエイ、ターが自らそれらの文化情報を発信すればいい。また、問題意識を持った機関が老人に働きかけてそれらの情報を聞き出す必要がある。今から説明することは、UNV と上智大学アンコール遺跡国際調査団が協力して行った活動である。

活動内容はイエイ、ターが村単位で老人会をつくり、記憶されている文化情報を出し合い、それらを記録し、孫でも理解できるように分かりやすい話に作り上げ、村で発表会を行って最後は「村の文化の本」に仕上げる、というものである。これらの一連の活動はイエイ、ターが行い、出来ない作業は若者に手伝ってもらえばよい。そうすれば、村人に自主性が生まれるし若者は手伝いながら学ぶことが出来るし、創造の充実感や達成感を味わうことも出来る。イエイ、ターは可愛い孫のために目を輝かしてまるで人が変わったように夢中になって作業に精を出すであろう。こうして老人が役割意識を持って生き生き生活し、子供や孫がイエイ、ターを見習いながら成長する環境を作る、これが私が描いた老人会活動のイメージである。

5. 老人会活動の実現可能性

こういう老人会の活動は、はたして実現可能だろうか。私は可能だと思うが、実際に活動するのはイエイ、ターであるからイエイ、ターがその気になってくれなければ実施出来ない。いずれ村に入ってイエイ、ターから意見を聞く予定であるが、その前に身近にいるイエイ、ターからも感想を聞きたい。やがて一緒に働くことになっている UNV のカンボジア人スタッフ 10 人に頼んで、両親やイエイ、ターがどう思うか聞いてもらうことにした。それは、事前調査のためカンボジアを訪れた 1998 年 10 月のことであった。

結論を言うと、反応は極めて好評であった。「大切な仕事だ」、と言われたスタッフがいたし、「そんな企画があるのか。やらせてもらいなさい」と言われたスタッフもいた。スタッフは 30 代で若い。そのため、文化といっても欧米式のプロジェクト・マネジメントやパソコンのような現代文化の方に関心が向いていて、目線が村のイエイ、ターには向いていない。だから老人のことなど考えてもいない。今度はじめて両親やイエイ、ターから仕事の意義を論されて目が覚めたのだ。急にイエイ、ターに関心が高まって、「早く村に行ってイエイ、ターからも考えを聞きたい」といい出した。

しかし、本当のところは多くのスタッフは村人が同じ考えを持っているかどうか半信半疑であった。「村の老人は、伝統文化や昔からの生活様式は時代遅れだという劣等感を持って早く近代化したいと思っている。だから、孫に伝えたいという誇りなど持っていない筈だ」というのが理由であった。10人のスタッフは村のイエイ、ターとの接触が密で村の事情にも明るい。そういうスタッフがこう言うのである。私が危惧したことは、「田畑の仕事が忙しくてそんな活動は出来ない」、と言われることであった。「老人は学識は低いかもしれないが、豊富な経験を持っている。いままで生きてきた自信もある。だから、伝統に誇りを持っている。それらを可愛い孫に伝えたいと思っている筈だ」、そう確信していた私の心はスタッフの発言で少々揺らいだ。とにかく、早く村に行つてイエイ、ターから生の声を聞きたい。そこで率直に意見を言ってくれる老人がいる村を3つ選んだ。それは、バンテアイ・クデイ遺跡の直ぐ北側にある北スラ・スラン村、東メボン遺跡の東側のプラダック村、西バライの北側にあるコック・トノウト村であった。はじめに距離が9 kmでオフィスから近い北スラ・スラン村に行った。7、8人のイエイ、ターに会って話しを聞いた結果はこうである。

「村には祖先から引き継いだクメールの風俗習慣がある。これらのしきたりを若者に伝えなければならない。でもその方法が分からない。イエイ、ターの会が出来て活動するなら早く遣りたい」。イエイ、ターはしっかりした考えを持っていた。失礼ながら、イエイ、ターは農作業には詳しいが伝統文化に誇りを持っているとは思っていなかった。だからこのコメントには私も含めスタッフ全員が驚いた。1989年以来カンボジアには何回も来ているが、関心はもっぱら遺跡にあつて住民に向いてはいなかった。私はイエイ、ターの思いや考えを全く知らなかったことを恥じた。

ところで、村の若者はイエイ、ターから伝統文化を引き継ぐことをどう思っているのだろうか。そんなことは古くさいと思っているかもしれない。それを確かめるためおそるおそるプラダック村で5、6人の少年に考えを聞いた。少年たちが言ったことは、「イエイ、ターからクメールの伝統を学びたい」、「民芸品づくりの技術を学びたい」、「クメールの歌や踊りを学びたい」であった。これを聞いて、村の若者は決して伝統文化を軽んじていないということも分かった。これらの事前調査が契機になって、スタッフも私もイエイ、ターを尊敬する気持ちになり、老入会は若者からも受け入れられるという確信を持った。

1999年6月、私は現地に赴任した。早速前回は訪問出来なかったオフィスからは20 km先のコック・トノウト村を訪ね、念のためイエイ、ター10人から老入会について意見を聞いた。あるイエイはこう語った、「お釈迦さまは人に功德を施しなさいと言われた。祖先から伝わったクメール文化を孫に伝えることはこの教えを実践することになる。ぜひ参加したい」、と。この意見は、信心深いイエイ、ターに共通した意見であった。老人会の活動を「功德」と理解したイエイがいることを知って老人会の活動は是非成功させなければならない、決して期待を裏切つてはいけなさと恩たら熱い使命感がわいてきた。

6. 期待される老人会

「老入会活動」を説明する前に、その意義や期待される効果を5項目に整理しておこう。まず期待されることは、老入会はイエイ、ターに伝統文化の保存や伝承に参加する機会を与えることだ。老入会によって活動が計画的かつ組織的に行われる基礎が出来る。若者が何か知りたいと思ったら老入会のメンバーに相談することも出来る。次に期待されることはイエイ、ターが次世代に伝えるテーマとそれを得意とする人のリストが出来上がることである。あとで述べるように、テーマのリストは村の文化の本をつくる場合にも役立つ。

第3はイエイ、ターの活動を見ながら若者が人間としてより良い生き方を学び、手本になるイエイ、ターを見つけることが出来ることだ。若者が身近に人間としての手本を持つことは、若者の成長過程において極めて重要なことである。第4は、マニュアルづくりという仕事がある。イエイ、ターは村人を助けたり相談にのったりしている。例えば子供の誕生、病気、結婚、離婚、葬式などである。こういう活動は伝統的に村の運営管理の問題と考えられていて伝統的な方法によって行われている。しかし、なぜかそれらの方法はイエイ、ターの体験と記憶の中に収められていて書き物になっていない。これらの問題処理がイエイ、ターによって行われている時代は口承伝承でもよいであろうが、時代とともに新しい問題が発生したら問題解決にも新しい時代感覚が必要になる。例えば、近代民主主義や人権思想が普及しつつあるし、親同士が結婚相手を選んでいた農村に両性の合意にもとづく結婚が普及しつつある。したがって、伝統と近代思想の混合によって新しい問題に対処しようとするならば、イエイ、ターと若者が対話して理解を深め合意する必要がある。若者が伝統的な風俗習慣を学び、底に流れている時代精神を理解するにはイエイ、ターからそれらを聞き出し、学習する必要がある。老入会の活動として村人によって作成されることになっている「村の文化の本」はその活動の一環である。最後は老人に生き甲斐と人間としての尊厳を実感してもらうことである。

7. 老人会設立の説明

老入会の設立に至る背景の説明が長くなったが、やっと老人会設立の段階にきた。スタッフが設立の目的や活動を村人の集会で説明した。3村で行われた説明会の模様は次の通りであった。1999年8月、シェムリアップ市から北12km、アンコール・トム遺跡の直ぐ北側に位置するノコル・クラウ村で79人のイエイ、ターを集めて集会が開かれた。50歳以上の人が197人いるから約40%の出席率で予想の50%よりやや低かった。集会の場所は村長の家の前庭で、朝8時から9時半まで、重要な話であるというので一番畑仕事に精が出る貴重な時間帯を割いて行われた。スタッフは、なぜイエイ、ター活動が必要か、イエイ、ターは何をするのかということについて説明し、ここまでは特に会場から発言もなく進行した。最後の質疑応答に入ったら村の78歳のターが挙手をした。質問は「薬草は活動の対象になるのか」であった。自分は得意だから若者に伝えたいというのである。スタッフは、それは重要なテーマであること、しかしテーマの優先順位は老入会で決められること、したがって老入会のイエイ、ターがこのテーマを選ぶことを願うと説明した。関連して1人のイエイがそのターに質問した、薬草は庭のどこに植えても育つのか、と。ターは、「育つことは育つが、1種類の薬草だけ選んで植えても、効き目が少ない薬草が育つ。庭に植えないで森に入って自然に生えている草を採った方がいい薬が取れる」と答えた。ターの説明では、庭に植えるという安易な方法ではなく手間隙かかっても効き目がある薬を造るには森に育っている草の方がいいということであった。こういうやり取りを聞いていて、さすが薬草の専門家だけあって説得力のある説明が出来る人だと思った。

翌月、プラダック村で説明会が行われた。この村は上に紹介したノコル・クラウ村から東に9kmの地点にあり、東メボン寺院遺跡からは東2kmのところにある。幹線道路に沿って細長く2kmも家が連なっている村である。歴史的に由緒がある村で、村長はそのことを大変誇りにしている。観光客が見学を訪れることが多く、そのこともあって村長は毎朝6時に自転車で村を見回って庭先が汚れている家を見つけたら家人に「掃き清めよ」と注意する。だから、スタッフの間ではアンコール地域で一番清潔な村と言われている。この村は椰子砂糖の産地で、パーム椰子から伝統的な方法で砂糖や砂糖菓子が造られてい

る。乾季になると、自転車の荷台に円柱形の缶を2つか3つ積んで、女性が7、8人一列になって村から16~17 km先のシェムリアップ市の市場に売りに行く。一行は、バンテアイ・クデイ遺跡の東塔門の前を通過してアンコール・ワットの東のお堀端に出て市に至るコースをたどり遺跡を5つ、村落を3つ、川に架かった橋を1本、林を4つか5つ通過する。この編隊は土地の人にとっては朝の風物詩である。砂糖は、国が戦争や内乱に突入する前（1970年代前半まで）はカンボジアの重要な輸出品であったが現在はもっぱら内需に向けられている。

村には寺院があり、老人会設立集会は寺院のホールで行われた。僧侶15人イエイ、ター55人が参加した。出席率は50%でまあまあであった。老人会活動の目的や活動内容が型どおりスタッフから説明されたあと質疑応答に入った。イエイ、ターは僧侶が同席している場合僧侶を差し置いて発言することはない。そこでスタッフは恭しく僧侶に発言を求めた。ホールの南側の一段高い所にあぐらをかいて座っていた50歳前後の住職が発言した。「クメールの伝統生活や価値観を保存し次世代に伝えることは極めて重要である。最後は文化の本に仕上げるといふこの活動が楽しみである」、と。この発言はイエイ、ターに活動の意義を再認識してもらうのに大変役立った。

同じ月、3番目の村で説明会が行われた。場所は西バライ遺跡の北側にあるコック・トノウト村である。この村はシェムリアップ市から20km北西にある。この村は老人会には極めて積極的で、集会は仏教儀式のあとまだ僧侶が残っている時間にあわせて行われた。僧侶がいることでその場が清められ説明会に権威が生まれた。こういう思慮深い段取りをしたイエイ、ターを見ても老人会に掛ける期待が大きいことが窺える。その日、僧侶12人イエイ、ター56人が出席した。50歳以上のイエイ、ターは110人いるから出席率は50%であった。老人会活動のガイドラインは後述の通りスタッフによって準備されていたためイエイ、ターが介入出来ることは限られていて、話題の中心はもっぱら老人会に入会するイエイ、ターの年齢のことになった。何歳から「イエイ、ター」なのかという問題である。1人のターが、「50歳からにしたらどうか」と言った。自分が寺院に行き始めた歳だからだ、と言うのである。つまり、田畑の仕事を子供夫婦に譲り自分は隠居して寺院に出入りし始める人がイエイ、ターでそれは大体50歳ぐらいだと言うのである。今度はイエイが発言した。「いま48歳であるが今年から寺院に行き始めた。だから48歳にしたらいい」と。発言は自分本位である。結局50歳前後ということになった。このやり取りを聞いていてイエイ、ターの定義がはっきりした。要するに「行動の主体が田畑から寺院に移った人」が老人会の会員としてのイエイ、ターなのである。

老人会の設立から1サイクルの活動が終了するまでの作業の流れを示すと次の(1)から(10)ということになる。

(1) 老人会の設立:

- (a) 村長の挨拶と老人会の設立宣言
- (b) スタッフによる老人会活動の説明
- (c) 老人会の役員選出—会長、会長代理、経理、書記、班長など
- (d) 老人会への入会年齢—約50歳
- (e) 老人会の班編成
- (f) 班の愛称の決定—草木や花の名前

(2) 会員カードづくり—氏名、生年月日、住所、関心テーマ、得意テーマなど:

(3) 班活動のためのテーマ選定

- (4) テーマに関する物語づくり－発表会や文化の本に備えて問答形式にする
- (5) テーマに関する絵かき－紙芝居の絵、人形劇の人形と背景の絵の場合もありうる
- (6) リハーサル－発表の順序、説明の仕方などの訓練
- (7) 発表会の準備－日時や場所の決定、招待状の送付、舞台づくりなど
- (8) 発表会
- (9) 文化の本づくり
- (10) 本の配布－打の図書室、小学校の図書室、国連ボランティア、ユネスコ、官公庁、マスコミなど：

8. 3村における老人会

老人会活動の可能性調査から早や1年が過ぎた。老人会設立の説明会の結果、3つの村のイエイ、ターはいずれもやる気であることが証明された。そこで、この3村で老人会を設立することになった。3村における設立集会の様子を紹介しよう。

1) ノコル・クラウ村

2000年6月、アンコール・トムの北のノコル・クラウ村で老人会の設立集会が開かれ60人が集まった。イエイが53人で圧倒的に多かった。その日は、折角の設立集会のためには最良の日ではなかった。ターの大半は急速バイヨン寺院の修復工事のために借り出されていたし、残りの半分は近くの寺院で行われる仏教儀式に出かけていたからだ。それでも老人会の方が大切だと思って村に踏みとどまったターが7人いた。スタッフは集会の雰囲気盛り上げるためカセット・プレーヤーで歌を流した。まず明るくリズム感に富んだ「クラバン・シェムリアップ」。クラヴァンはシェムリアップ州の象徴の花で、アンコール遺跡の中にもこの名前のレンガ造りの遺跡がある。花は白く細長い。大きさは小指ぐらいで上品な香りを放つ。次は「スヴァイ・チャンテイ」。これはカンボジアの特産物の1つであるカシュナツツの花を歌った曲で、小学生でも知っている。最後は「イエイ、ター」。これは「お婆ちゃん、お爺ちゃん」という歌である。新婚の婦人が歌う、「自分たち夫婦には何か肝心なものが欠けている、それに比べてイエイ、ターはいつも一緒に月夜の光のようにやさしい、どうしてそんなに仲がいいの、お年寄りが仲がいいことは社会にとって大切ね、私たちも幸せになりたい、どうすればいいの、教えて」という内容で、正に老人会のためにあるような歌である。

住民は活動の趣旨はよく理解しているので説明は簡単に終わらせて、イエイ、ターの年齢の話になった。はじめにイエイが52歳以上ではどうかと発言した。理由は、すでに別の村でも指摘されたように、その齢から寺院に行き始めたからという。もう1人のイエイは50歳がいいと言った。理由はまったく同じである。ターが50歳説を支持し結局50歳以上ということになった。それから村は7つの班に分けられ各班から1人の班長が選ばれた。会長、会長代理2人、書記、会計など計12人の役員が選出されたあと、7人の班長は草木から選んで班に愛称をつけた。会が終わりに近づいた頃、村で一番尊敬を集めているターで特に「アッチャ」と言われている人が、これからどういう活動を行うのかと質問した。スタッフは用意していた「老人会の主な活動」のカンボジア語版を配布し、「会員カードづくり」から「文化の本づくり」に至る活動を説明した。アッチャは「先の先まで良く計画されていることを知って安心した」といって微笑んだ。アッチャだけあって全体がどういうシナリオになっているかということに気になっていたのである。私はアッチャと言われる人はプロジェクト・マネジメントが出来る立派な人だと思った。

ここで、カンボジアの村落社会を理解するために不可欠なアッチャについて紹介しよう。「アッチャ (acha)」は人間的に村であるいは社会で最も尊敬されている男性でかつ村長とは別に村の纏め役を行っている人である。村長は以前は政党から指名されていた政治的なポストであるが、アッチャは伝統的に寺院の僧侶や村人から推挙される人間社会の人格者である。歳は40代の人もあるし60代の人もある。平均すると56、7歳であろうか。イエイ、ターの懇願に応じて5年も10年も務める人がいる一方、「自分はまだ修行が足りないなのでその資格がない」と言って辞退する人もいる。本人にとっても家族親戚にとってもアッチャは名誉な役であるが、社会的な仕事を優先するので、農繁期に働き手が欲しいときでも家事をしないので家人にとってはありがた迷惑という面もある。しかし、家族が助け合って夫にあるいは父に名誉ある仕事を行って貰うのが一般的なようだ。アッチャは単なる名誉職ではない。体が動き複雑な祭儀の陣頭指揮がとれる人である。アッチャになる人は青年時代に最低5、6年僧侶を経験した人で、読経が出来、仏教儀式を取り仕切ることが出来る。村では人生相談にのったり、家庭のいざこざを処理したり若い僧侶を叱正し指導できる人である。勿論、自分から遣りたいと手を上げる人などいない。そういう目立ちたがり屋はそもそも人から好かれない。また、村や寺院では安心してお布施を預けることが出来る人でもある。以上の説明からも分かるように、アッチャはイエイ、ターにとっても若者にとっても尊敬の的である。村の事情に詳しいスタッフが、「村の纏まり具合を見るには、アッチャに会えば見当がつく」というほど、カンボジアにおいては村におけるアッチャの存在感は大きい。

2) プラダック村

2000年2月、村の篤志家が村の識字教育の教室として提供している自宅の床下が臨時に老人会設立集会の会場になった。出席者の男女比率はイエイ44人、ター9人でイエイの方が老人会について関心が高いように見えるがそうとも言い切れない。昼間ターは働きに出ることが多いから家を守るのはイエイだからである。会合は村長の趣旨説明から始まったが、そのなかで村は「甘い瓜王³」の話と関係が深いこと、上品な方言が残っていること、トロットというカンボジアの正月に演じられる伝統的な歌と踊りの先生がいることなどが強調された。そして、村の誇りを維持し祖先が遣した遺産を保存し伝承する老入会活動への期待感が強調された。そのあと老入会は2班編成となり班の愛称はロムシルとロムドールという花の名前になった。男女3人ずつ計6人の世話役が互選され老人会の体制が整った。

3) コック・トノウト村

1999年11月、コック・トノウト村でイエイ、ター会の設立会が開かれた。村は人口1800人、端から端まで4kmもある細長い村である。50歳以上の人が109人いて(イエイ63人、ター46人)、人目に占める割合は6%で極めて少ない。村によって多少異なるがUNVが活動している11村の場合、50歳以上の人の村の人目に占める割合は6-8%

³ チェイという瓜づくりの上手な人がいて甘い瓜をつくって王に献上していた。ある夜王はチェイの甘い瓜が食べたくなり家来をつれて畑に忍び込んだ。王とは知らないチェイは矛を投げたら当たって王は死んだ。家来は新しい王が乗る象を連れて王の候補者を探しに出かけた。チェイの前にきたらその象がひざまずいたので相談の結果チェイはトロサック・パアエム王(甘い瓜王、1323-1340年)として王位についた。プラダック村は傷を受けた王が治療に来た村であるが、村人の介抱の甲斐もなく王は息を引き取ったといわれている。

である。日本の場合は 30%とか 40%という数字になるようであるが、カンボジアではイエイ、ターが如何に貴重な存在かが分かる。

村長の話しによればイエイ、ターは今か今かこの日が来るのを待っていた。会場は村の集会所で子供が 14、5 人見学にきていた。いまや老人会の集まりでは恒例になった音楽、クラバン・シェムリアップ、スヴァイ・チャンテイ、イエイ・ターがカセット・プレーヤーから流された。イエイは音楽に合わせて踊り始めスタッフも踊った。イエイ、ターは伝統的な歌や踊りが好きでとにかく陽気である。見学に来ていた子供たちはそういうイエイ、ターを真似しながら伝統的な踊りを覚えていく。北スラ・スラン村と同様この村でも両親が森や畑仕事に出ているときは、イエイ、ターが留守番をする。子供たちは学校にあがるまではイエイ、ターと過ごす時間が多く、礼儀作法はイエイ、ターから学ぶ。老人会は 3 つの班に分けられ役員が選ばれた。首班の愛称は人口に膾炙した花、ロムチェイ、ラホーン、スヴァイ・チャンテイになった。1999 年は国連が定めた「国際老人の歳」で、年内にこの村で老人会が設立されたことにイエイ、ターは誇りを感じたようである。こうして 3 つの村で老人会が誕生し、いよいよ本格的な活動が開始される体制が整った。

9. コック・トノウト村の老人会活動

コック・トノウト村は、前項で紹介した 3 つの村の中で先陣を切って本格的な活動を行いたいと志願した村である。イエイ、ターが志願するまで積極的になってきたことを知って私はイエイ、ターのチャレンジ精神に敬意を表したくなった。こうなったら、イエイ、ターのやる気を損ねないように次のあるいはその次の目標とその意味を示せば良い。これからはこの村に統って活動内容を紹介する。

1) 会員カードづくり

老人会が設立されて、まず始めに行われる活動は「会員カードづくり」である。これは、いわば老入会のイエイ、ター 1 人 1 人の登録カードを作る作業である。カードは、用紙をイエイ、ターに配って記入してもらう方法とはらなかった。字の読み書きが出来ないイエイ、ターがいるからである。そこで、イエイ、ターに集まってもらってスタッフや読み書きができる青年に手伝って貰い、対話しながら聞き出した情報を A 4 判 1 枚の用紙に記入する方法を採用した。会員カードの作成で最も重要なことは、イエイ、ターから「得意なテーマ」を聞き出すことだ。

2) テーマ選び—得意なこと

「テーマ選び」とは、イエイ、ターが申告したテーマを班ごとに集計し班で活動するテーマを 1 つ選び出す作業である。コック・トノウト村では 3 班が各々のテーマを選んだが、出されたテーマを見たら班の間で余り差がなかった。そこで一番初めに会員カードづくりを行った「西班」の場合を紹介しよう。

2000 年 1 月上旬、西班で行われた会員カード記入の会合には、24 人のイエイとターが集まった。まず関心があるテーマから聞き出す作業が始まった。24 人から出されたテーマは次の 19 項目であった。

① 伝統音楽 (*)

② 伝統的なむしろ

③ クメールの麺づくり (石臼で米粉を作り水で溶く。それを底に穴を開けた缶詰の缶に入れてところてんのように押して熱湯の中に落としてゆでる。日本でいうと細めのう

どんである)

- ④稲作 (森の開墾、畑づくり、水田づくり、栽培、収穫。森を開拓し水田にして米が取れるようになるまでには最低4、5年必要である)
- ⑤米から造る酒 (酒は椰子ジュースからも造られる)
- ⑥クメールの流行歌 (*)
- ⑦野菜づくり (1995年、UNVが入ってから盛んになった。それまではもっぱら稲作が行われていた。)
- ⑧結婚祝いのケーキ
- ⑨瞑想 (寺院の境内に自分でつくる小屋で3ヵ月こもって瞑想する。食事は家族が毎日1回か2回とどける。大変つらい修行である。)
- ⑩クメールのことわざ・格言
- ⑩伝統的な整骨術 (患部を竹の棒で軽く叩く。近代西洋医学を学んだ日本の医者に聞いたが、叩く根拠がよく分からないと言われた)
- ⑩伝統的な遊び
- ⑩クメールの神話
- ⑩コック・トノウト村の歴史
- ⑩伝統儀式 (*)
- ⑩産婆術 (産婆は村に1人か2人いるのが普通である。この村にに人いる)
- ⑤伝統薬事 (今でも村では主流である。村長は30種類以上の薬を作る)
- ⑩伝統的な髪油の製法 (木の実を絞って油をとる。品質は草木の種類によって2種類ある)
- ⑩お経

これらのテーマを見ると関心は各人各様であることが分かる。ことわざ・格言、神話、村の歴史、お経などは知的好奇心から出たテーマであるが、その他は生活に密着したテーマで関心はもっぱら日常の生活にあることが分かる。その中でも票が2つ以上入ったテーマは伝統音楽 (*)、流行歌 (*)、伝統儀式 (*) であった。

次は「得意なテーマ」である。集計したらこちらも18項目もあり、イエイ、ターはそれぞれ得意な分野を持っていることが分かる。関心があるテーマを質問したときは直ぐ答えが返ってきたのに、「得意なテーマ」の方はなかなか答えてもらえなかった。ここには村人の考え方を知るために重要な事が含まれていると思うので、イエイ、ターが申告したテーマを紹介する前に、そのことから説明しよう。

カンボジア人の女性スタッフが「イエイの得意なテーマはなんですか」と尋ねた。イエイは「そんなの、ないよ」と答えた。スタッフが「何か1つくらいあるでしょう」と言ったら、「私は普通の人間だから、そういわれても得意なことなんてない」と言った。イエイが言いたかったことは、自分は生活に必要な技術を身につけているのであって何も特別な技術を持っているのではない、自分が持っている技術を特別扱いするのは村の生活知らない都会人だ、自分の技術は村で生活する人なら誰でも身につけている生活技術だ、ということであった。何回聞いても同じ答えが返ってきて堂々巡りになり、スタッフは「インタビューの趣旨が伝わらない」といって私にお助けを求めた。ちなみに、スタッフはブノンペン育ちの26歳の考古学士である。この問題は、村の生活知らない都会育ちの若

者と村のイエイとの間のコミュニケーション・ギャップ、というように大げさにとらえるべきではない。質問の仕方を変えればよいのであって単なる対話術の問題かもしれない。要するにイエイの気持ちになって質問することが必要なのである。「亀の甲より歳の功」とはよく言ったもので、私はこう質問した。

イエイ（お婆ちゃん）、お孫さんいる？

「いるよ」

名前は？

「テイヤ、女の子よ」

幾つ？

「5つ」

可愛いんでしょう？

「そりゃー、可愛いわね」

そのお孫さんに敢えてあげたいことって、ある？

「ある、ある」

なに？

「色々あるわね」

例えば？

「祭りのときのケーキづくり、ほら、もち米でつくる」

知っています。ほかには？

「野菜のつくり方、ゴマとかインゲン豆とか。体にいいから」

そう、まだある？

「あるよ」

なに？

「ロムチェイ・マットの作りかな」

なぜ？

「なぜって、マットも編めないでは、怠け者だわね」

怠け者ならどうなるの？

「そんなこと分かってんでしょ。家の恥よ。ご先祖さまに申し訳ないわね」

ほかにある？

「まだあるよ、なんでも出来るから」

どれを一番教えたいの？

「ロムチェイ・マット、毎日使うから」

自信あるの？

「もちろんよ」

ざっとこういう会話になった。時間がかかった。まわりくどかった。でも、こういう手続きを経ないと、このイエイがロムチェイ・マットの編み方が得意だということは引き出せない。マットに限らない。村人から真意を引き出すには何故だか分からないが時間がかかる。何回も訪ね、さまざま角度から質問し、5つも6つも問いた点情報を繋ぎ合わせ、他との関連も確かめないとそれが真実だということの確信が持てない。それに、聞かれないことには答えない。これは私1人の感想ではない。カンボジア人の研究者も同じ感想を持っている。ただ何故なのかが分からない。村人へのインタビューはこういう基礎的

な体験が無いと聞いたこと確かさに不安が残る。とにかく、このようにして 24 人から聞き出した得意なテーマを順不同に挙げれば次のようになる。

- ①伝統的な整骨術
- ②伝統的なロムチェイ・マットづくり(*)
- ③伝統的な籐のかごづくり (*)
- ④クメールの麺づくり
- ⑤伝統薬事 (*)
- ⑥伝統の絹織物編み
- ⑦野菜づくり
- ⑧産婆術
- ⑤椰子の葉で作る牛ひき用の丈夫なロープづくり
- ⑩脱穀 (もみ米を唐臼でつくこと。下手をすると米が砕けてしまう)
- ⑩魚を取るかごづくり
- ⑩稲作 (田植えから収穫まで)
- ⑩アッチヤ (すでに紹介した通り、村で最も尊敬を集めている人。伝統儀式の日取の決定・段取り・議事進行を行う。僧侶と世俗人との橋渡しも行う。)
- ⑩家の建築技術 (材料の選定から組み立てまで)
- ⑩悪霊の除去
- ⑩結婚祝い用のケーキづくり (もち米でつくる。段取りと工程が複雑で、年季が必要である)
- ⑤伝統儀式の企画から実施まで (アッチヤが取り仕切る。仏教儀式、結婚式、葬式の担当は分かれている。)
- ⑩伝統薬事と処方

である。

票が2つ以上人ったテーマは、ロムチェイ・マット(*)、伝統的な籐のかごづくり(*)、伝統薬事(*)であった。この中から1つ選ばれた活動テーマが「ロムチェイ・マットづくり」である。ロムチェイは水辺に自生する。細長い葉に鋭いとげが無数にある丈2mにもなる大きな植物である。数十年前はトラやいのししなどの猛獣から村を守るのが目的であったが、最近は動物は来なくなった代わりにときどき人間が物取りに来るので、用心のために村の境や家の回りに植えられている。引き続きこの西班はロムチェイ・マットの作り方を子供たちに分かりやすく説明するための「物語づくり」の準備に入った。

3) 想定質問づくり

「想定質問づくり」とは、活動の様子を説明する物語づくりである。本来なら、イエイ、ターにすぐ「ロムチェイ・マットの作り方」という説明書を書いてもらえばいいのであるが、書くことに慣れていないイエイ、ターにとってその作業は余りにも困難である。そこで、物語は問答集にすることにした。答えはイエイ、ターの頭の中に描いてもらって、子供から質問が出たと想定しその質問を出して貰おうと思った。

その日は西班を中心に他の班からも関心がある人が自発的に集まり 20 人ものイエイ、ターがいた。すでに関心があるテーマと得意なテーマを聞き出したスタッフが趣旨説明を

してから、イエイ、ターに「さあ、想定質問をつくってください」と言った。言われたイエイ、ターは考え込んだ。10分経っても作業は一向にはかどらない、要するに1つの質問も出てこないのだ。こんな筈ではないのにいったいどうしたのか。スタッフも私も不安になってきた。やがてその理由が分かった。いままでやったことがない作業だからどうしたらいいかが分からないのだ。いったい何を行うのか、なぜそんなことをするのか全く理解されていない。だからイエイから「質問ってどうやってつくるの?」と聞かれてスタッフは答えに窮した。そこで、急遽ピンチ・ヒッターとしてイエイに説明することになった。

「イエイはいまここでマットを編んでいる。そこにイエイの可愛い孫のテイヤが来たでしょう。テイヤはイエイがマットを編んでいるのを見て何か聞いたとする。なんて聞くと聞く?」、何しているの?「その通り、それから?」、この草の名前は何か?「はい、それから?」、作ってどうするの?「そう、それから?」、売ったらお金になるの?「それから?」、なぜ色なんかつけるの?「そう、まだある?」、この布はなんの役にたつの?「そう、そう、そういう質問をどんどん出してみて」と言ったら、イエイは、「分かった」、と言って微笑んだ。求められていることは何か、何をしたらいいか、ということをやっと理解してくれたのだ。

先ほど「得意なテーマ」のヒヤリングのところでも述べたように、村の老人から答えを引き出すためには抽象的な質問をしても駄目だ。それでは答えは返ってこない。実際に起こることをその通り順序だてて説明すると分かってもらえる。とにかく格闘しながらイエイ、ターから聞き出した質問は次の通りである。

- *この名前は何か?
- *これはどのように使うもの?
- *これはなんていう草から作るの?
- *その草は村のどこにあるの?
- *どこから織りはじめるか知っている?
- *どんな道具を使うの?
- *とげで怪我をしないようにするにはどうするの?
- *1枚織るのにどのくらい時間がかかるの?
- *市場で買うといくらすると思う?
- *どのくらいの期間使えると思う?
- *端に付いている2つの布切れは何のため?(就寝のとき足のほうにする印)
- *模様の色はどのようにしてつけるの?
- *色はどこで買ってくるの?(昔は草木から自然染料をとり、今は市場で合成染料を買う)
- *できのよしあしはどこで見るの?

始めは、想定質問なんか作れないといていたイエイ、ターは立派に質問をつくり上げた。これらの質問の答えは、質問を作ったイエイ、ターの頭の中にもう出来上がっている。この場合の質問は、答えが分かっているから作れるという種類の質問である。こういう作業はイエイ、ターにとっては初めてで、イエイ、ターが思考を深め説明に自信を持つためには必要な頭の体操である。この作業を通じて、可愛い孫の姿を思い浮かべるとイエイ、ターの作業がはかどることが分かった。作られた想定質問は発表会のときに使える。カン

ボジアには「子供は1タフ可愛い、孫は1タン可愛い」ということわざがある。1タンは1タフの2倍大きい米を入れる伝統的なカゴである。このことから、「孫はわが子の2倍ほど可愛い」という意味になる。孫を思い出し目を輝かせながら想定質問を作っているイエイ、ターの姿を見て、このことわざは今この場で確かに生きていると思った。

4) 絵描き

次の作業は「絵描き」である。これは各班のリーダーが発表に使う絵を描く作業である。もし紙芝居を使って発表するときは紙芝居の絵と木枠を作る作業ということになるし、人形劇で発表する場合は人形と背景の絵を描くことになる。今回は人形劇ではなく紙芝居を行うことにして、その絵を描くことにした。街で売っている模造紙を使う予定であったが、UNVが活動している村でオフィスから出る紙を再生している村があるので、紙質が厚く破れ易がそれを使うことにした。2000年11月、街で調達したカラーのマジック4色、濃い4Bの鉛筆、消しゴム、そしていま述べた73cm x 73cmの再生紙10枚を村に持ち込んだ。

この日、村長の家に集まったのは3班のリーダーイエイ、ター7人と子供5人であった。スタッフは作業を口頭で説明するより見本を見せた方が理解が早いことが分かっていたので、予め1枚の紙に3、4個のバスケットの絵を描いて村に持って行った。勘がいいイエイ、ターは小道具を見て今から何をすべきか直ぐ理解した。念のため「何をするか、分かる？」と聞いたら、イエイは「チャー（ハイ）」と言って微笑んだ。

集まったイエイ、ターはロムチェイ・マット、籐のカゴ、ピンピエットの楽器の3つの班に別れた。イエイ、ターは1枚の白紙の周りに集まって額を寄せ、どんな絵を描いたらいいかを考え始めた。私は、スタッフが持ち込んだカゴの絵がどう扱われるかに関心があった。始めはちらちら見ていたが「こういう絵を描くのか」ということを理解したら目もくれなくなった。それは「自分は自分の絵を描く」という意思表示であった。なかなか自我が強い、負けず嫌いだ。そのあとの行動は、鉛筆でカゴのデッサンを始めたターがいるかと思うと、デッサンをしないでいきなりカラーのマジックで描きだしたターもいた。楽器の班はメンバーがイエイ1人なので皆から離れてカラーで楽器を描き始めた。こうして絵描き作業が始まったので、「どう、面白い？」と聞いたら、イエイは「チャー」という。「難しい？」と聞いたら、返事は「チャー」であった。何を聴いても返事はチャー、チャーだ。作業に集中しているのか、どう描いたらいいか思案中なのか、スタッフにも分からなかった。2時間過ぎたがどの班も1枚の絵も描けなかった。この先どうなることかと不安になったが、焦る気持ちを抑えてその日の作業は終わりにした。

時期的に11月は米の収穫期でイエイ、ターは多忙である。そこで、作業の続きは1ヵ月後の12月末から始めた。どの班も作業の進捗状況は思わしくなかった。1枚の紙に3つか4つの絵を描いただけで作業は止まった。私の希望は、1つの班で紙を3枚使ってそこに絵を9つか10描いてもらうことであった。そうすれば1班あたり30分の効果的な発表が出来るからだ。しかし、いままで順調に進んできた老人会の活動は絵描きのところで止まった。

2001年1月上旬3回目の活動を行った。イエイ、ターは何をすべきか作業内容は分かっている。分からないのは、作業量と締切期限である。そこで、孫が分かりやすいように絵をさらに6つ描くこと、紙はあと2、3枚使うこと、そして完成期限は1月中であること、などを説明し少し急いで欲しいとお願いした。2月に入ったら直ぐリハーサルを行い、イエイ、ターが大勢集まる2月中旬の仏教儀式の日に発表会を行いたいと思っていたから

である。「分かってもらえますか？」と聞いたら、イエイたちは「チャー」といった。そこで、私は作業の邪魔をしないようにその場を離れて 500 m 先の西バライの土手まで散歩に出掛けた。

1 月は乾季のまっただ中で気温が低く空気が乾燥していて涼しい。鶏ぐらいの大きさに黒と茶色の羽根があり尾が長い鳥がケケと林の中で枯れた声で鳴いていた。林の中の小道は団扇ぐらいの大きさの落葉で覆われていてその上を歩いたらカサカサと乾いた音がした。私は、その音を楽しみながら西バライの土手に出た。土手の両側にはすっかり葉を落とした灌木が密生していた。私は枝の隙間から微かに見える西バライの水面を見てほっとした。水のある景色はいつでもどこで見てもいいものだ。西バライは東西 8 km、南北 2 km、深さ 3～5 m の貯水池で、灌漑用とも宗数的な意味があるとも言われている。10 世紀末から 11 世紀にかけてジャヤヴァルマン 6 世の時代に建造された遺構で、長方形の巨大な構築物である。これを見ていると昔のカンボジア人の構想力の雄大さに敬服したくなる。上手の上の道路は幅 8 m もあり乾季のため水面は 20m も下にある。いま立っている場所は幹線道路 6 号線から 6 km も離れていて、普段は村人が牛に草を食べさせるために通るくらいでまったく人通りがない寂しいところだ。

気持ちを落ち着けるために来たが、老人の顔を見ていないと落ち着かないので村に戻った。イエイ、ターが絵を描いている家が見えるところまで来たら人だかりが見えた。上は白のシャツ、下は紺のスカートや半ズボンをはいた小学生の一群が作業場を囲んでいた。11 時、二部授業の午前の組の授業が終わって家に帰る村の小学生たちだ。イエイ、ターが熱心に絵を描いている場面を一度でいいから子供たちに見てもらいたいと思っていたが、図らずも目の前にその光景を見て嬉しくなった。私は足早に近づいて、どう思うと聞いた。子供たちは口々に、「上手」、「色がきれい」、「描いてみたい」と言った。学校で絵を描くのと尋ねたら「絵の授業はない」という。図工や音楽の授業もないそうだ。先生かないし、教材もないからだ。こういう状態だからイエイ、ターの作業は孫たちにとっては正に羨望の的で、なかなかその場から離れようとしなかった。

一方イエイ、ターは満足げに笑みを浮かべていた。覗き込んだら縁側に描きあげた 9 枚の絵があった。カゴの絵には遠近感がないが素朴でいい。こまかいところまで描かれているが、色が薄かったり線が細かったりして 5 m も離れて見たらよく見えない。しかし、今はそんなことは問題ではない。描き上げたこと、そのことがイエイ、ターにとって大切なことなのだ。これで、発表会用の小道具が揃った。でも、いきなり発表会に進むには不安がある。イエイ、ターには出来るだけ多くの体験をしてもらいたいので、発表の「予行演習（リハーサル）」を行うことにした。

5) リハーサル

イエイ、ターの顔には絵を書き上げたという自信が輝いていた。リハーサルの場所は米銀行の倉にした。9 枚の絵を張る板壁があるからだ。30 人ものイエイ、ターが集まり 40km 先のプラダック村からは老入会の会長が見学に来た。イエイから、「リハーサルってどんな風にやるの?」、という質問がきた。いまから行うことのイメージが湧かないらしい。私は、「発表会と同じことを行う」といった。そして、どういうふうに発表しますか、と尋ねたら「絵を説明する」、という。説明することには違いないが、イエイ、ターが一方的にしゃべればよいと言うものではない、老入会活動が目指すものは伝統文化の伝承と次世代の育成であって、主役は「孫である」ということ、したがって、「発表会の主役もイエイ、ターではなく孫であること」、であった。問題は、子供がイエイ、ターの発表を「面

白い」と思うかどうかである。子供たちは正直だから面白かったら乗ってくるし、面白くなければ乗ってこない。そこで、面白くてなおかつためになることを造るのが、知恵あるイエイ、ターでなければならない。イエイ、ターが絵を指して子供に「これ、何に？」と聞く。子供が答えたら、「よく分かったね」と褒めて、次は別の絵を指して「これは？」と聞く。このように絵を指しながら質問して、子供から答えを引き出しながら話を進める。これこそわれわれが目指す発表会である、と言った。そうしたらあるイエイが、「このあいだ作った想定質問の質問を孫にすればいいのだ」といった。そう、正にその通りである。

リハーサルでは、3人の班長が順に前に出て発表を始めた。思ったよりゆっくり質問し、フロアのイエイ、ターが孫の役割を果たして質問したイエイに答えた。答えたイエイの姿勢は堂々としていた。イエイ、ターは発表の要領をつかんだように見えた。各班とも持ち時間の30分を使って発表した。そのあと評価会が始まった。「絵ばかり見ないで、子供の顔を見たほうがいい」、「下ばかり見ないでもっと、自信を持って説明した方がいい」、「もう少し大きな声で話さないと聞こえない」。意見は率直であった。イエイ、ターは仲間にお世辞など言わない。イエイ、ターが口にすることは本音であり、聞いていてドキッとすら率直だ。イエイ、ターは、完全に何をどうすればいいか、それはなぜかということころまで理解していた。プラダック村から来たイエイが、「出来る、出来る、大丈夫」と激励してくれたところでリハーサルを締めくくった。

6) 発表会

ついに、歴史的な日がきた。それは、2001年2月16日、発表会の当日である。午前7時、カンボジアとしては珍しく肌寒い朝で村のあちこちで焚き火を囲む姿が見られた。村の中央にある集会所に行ったら恒例の仏教儀式が終わったところで、僧侶やイエイ、ターが歓談しながら発表会の開催を持っていた。集会所の周りには空き地がありさらに外側は100mくらい林になっていてその林を抜けると小学校がある。そこから先生に引率されてきた小学生が行儀よく縦横に列を作って集会所の東側に腰を下ろしていた。生徒の目の前では、樹と本の間でロープを渡して工事用のシートを張り9校の絵をガムテープで貼りつける作業が行われていた。

会場には360人もの聴衆が集まっていた。村の大きな仏教儀式でも150人集まれば盛大だと言うから大変な賑わいである。内訳は老人会のイエイ、ターが90人、青年が20人、入学前の幼い子供

50人、小学校の生徒190人、先生3人、ノコル・クラウとプラダック村から5人、国内外の研究者9人、僧侶6人、そしてスタッフ10人であった。議事進行はUNVのカンボジア人が務めた。村長の挨拶のあとリハーサルで発表した3人のイエイが1人ずつ舞台に進み出た。会場からは拍手が湧いた。伝統衣装で正装したイエイはやや頬を高潮させていた。好奇心の塊のような小学生は反応が速い。イエイの質問に大きな声で答えた。「これ、何の絵か分かる?」「はい、ロムチェイ・マットです」。「そうね、ではこれは?」「ロムチェイの草です」。普段顔なじみのイエイが学校の先生のように説明を行ったのだから、子供たちは喜んで答える声も弾んでいた。集会場には今のいままで、村の誰も考えたことがなかったことが始まった。こうして伝統的なマットの編み方が説明され、籐のかごのつくり方、そしてピンピエット音楽に使われる楽器の名前、材料、弦の本数、音色などが説明された。

発表はよく準備されているという印象を与えた。発表者が、つかえたり右往左往したりする場面がなかったからだ。「ぼくのイエイはすごい。ロムチェイ・マットについて何で

も知っている」。孫は自慢げに友達にそういったに違いない。海外の大学からアンコール地域の観光や建築物の調査にきていた研究員は、「イエイ、ターがここまでやるとは知らなかった」、「村のイエイ、ターは賢い」、「発表の仕方が上手だ」、と口々に賞賛した。学校の校長先生は、「私たちは教科書に書いてある知識や理論や技術を教える先生である。しかし、イエイ、ターは生活や文化についての先生である」といって評価した。僧侶は普段イエイ、ターに仏教の話しをする人であるが、イエイからこのような伝統技術の話しを聞いたことがなかったし、絵を描く技を持っていることも、上手に説明する技術を持っていることも知らなかったようで瞬きもしないで聞き入っていた。こうして、発表会は出席者にさまざまな感動を与えて終了した。

7) 文化の本の編集

文化の本の編集は、老人会活動の仕上げの活動である。これは、村の歴史、村の名前の由来、村固有の伝統儀式や風俗習慣、そしてイエイ、ターが出した得意なテーマなどを本にする作業である。目的は、文化情報を保存し次世代に伝承するテキストとして使うためである。村に伝わっている口承伝承も掲載される。本の編集作業はイエイ、ターだけでなく、読み書きできる若者も動員して3世代の共同作業として行われる。コック・トノウト村の場合は次のような項目を作ったところで2年間のプロジェクトの活動期限がきて「文化の本」の制作は未完のままであるが、参考までに項目を挙げておこう。

コック・トノウト村の文化の本の内容（案）

- ・コック・トノウト村の名前の由来と歴史
- ・村の誇り、モットー、象徴（花、樹、鳥、昆虫など）
- ・農事カレンダー（作物ごとの年単位、月単位の農作業）
- ・祭儀カレンダー（祭儀ごとの年中行事、月単位の行事）
- ・村の伝統的な生活様式（衣食住、口承伝承、価値観、信仰）
- ・村の伝統技術（織物、伝統薬事、産婆術、占い、かごづくり、マットづくり）
- ・村の伝統芸能（音楽、舞踊）
- ・野菜、果実、村の樹木、草花、小動物、鳥、昆虫
- ・村の地図（家と番地、井戸、道、小川、運河、灌漑、橋、池、学校、集会所、遺跡、田畑、林、など）
- ・ネアクタ（土着信仰の霊の名前、安置場所、儀式）
- ・村の伝統的な風俗習慣（礼儀作法、通過儀礼）
- ・村とアンコール遺跡との関係
- ・村の自慢の自然景観、社会景観、文化景観
- ・老人会の組織、イエイ、ターの得意テーマ、村の統計
- ・村の人口、年齢構成、職業、出身者の動向、その他村を紹介するために有意義な事項

以上がイエイ、ターとスタッフが作成した「村の文化の本」の内容である。これを見て読者はどういう感想を持たれるであろう。アンコール地域の村で質素に暮らしているイエイ、ターが考えることは、既成概念にとらわれず実におおらかであるということではないだろうか。

10.おわりに－イエイ、ターの社会的役割

これは一般的な問いであるが、「イエイ、ター」という言葉を聞いて読者がイメージされることは何であろう。既成概念に凝り固まって新しい考えを取り入れようとしないう頑固ものということだろうか。人生経験が豊富で知恵があり、判断が正しくて若者のよい手本ということだろうか。はたまた、実利より心の満足を求め、社会から隠遁して趣味に生きる人、ということだろうか。誰を思い浮かべるかによってイエイ、ターのイメージはさまざまであろう。

では、ここに紹介したアンコール地域の村のイエイ、ターは読者にとってどういう人たちであったであろう。実際に村に入ってイエイ、ターと活動しないと分からないかもしれないが、この小論を読んだ方ならおおよそのイメージが描けるであろう。コック・トノウト村のイエイ、ターが申告したテーマを見ると、1人のイエイ、ターがいればそこには1つの「得意な分野」があることが分かる。しかしそれだけではない。広いアンコール地域では村が点在していて、隣の村は10kmも20kmも先に行かないとない。したがって、村は各々の独立した生活集団になっている。村では生活は自給自足、村の運営は知恵と経験の塊であるイエイ、ターが中心、伝統文化や躰もイエイ、ターから子供に伝承されている。その理由は村が置かれている状況を想起すれば、なるほどと理解できる。問題はイエイ、ターがいない家の子供である。親が働きに出ると子供が留守番をしたり年下の弟や妹の世話をしたりするから、学校があっても行く暇がないし伝統的な躰も行われぬ。こういう家庭環境によって生ずるハンデを解消するには組織化されたイエイ、ターの活動が必要である。つまりイエイ、ターには次世代に伝統文化を伝承したり人間教育を施したりする社会的な役割があるということになる。

しかし、イエイ、ターには新しいことに挑戦しないとか、古臭くて弱々しいというイメージがあることも事実である。でも、ここで紹介した村のイエイ、ターは絵を描くとき始めは戸惑っていたが投げ出さないうちちゃんと描き上げた。想定質問もちゃんと作り上げたし発表も堂々とやりこなした。村のイエイ、ターは新しいことをやりこなす能力を持っていることも証明された。いままで、イエイ、ターがそういう目で見られなかったのは、イエイ、ターへのアプローチが行われずイエイ、ターの潜在能力が引き出されていなかったからである。イエイ、ターの潜在能力をいかに引き出して社会文化発展に活用するか、これが村のそして社会の今後の大きな課題である。

イエイ、ターはインタビューに答え、班の活動テーマを選び、絵を描き、想定質問をつくり、発表のリハーサルを行い、とうとう360人を前に発表まで行った。こういう一連の活動を行って経験を増やし自信をつけたイエイ、ターは大きな「成長」を遂げた。イエイ、ターの発表を聞いて200人もの子供が伝統文化の意味や価値を再認識し、イエイ、ターから伝統文化を学ぶきっかけを掴んだことは子供にとって大きな「成長」である。コック・トノウト村のイエイ、ターは、村に仕組みがあり推進役が居れば村の伝統文化保存や次世代育成に貢献できることを証明した。

アンコール地域におけるイエイ、ターの最も重要な役割は、子供の手本となり、子供に目標を与え、子供に強く正しく生きる希望と勇気を与えることである。子供が「歳をとったらああいうイエイ、ターになりたい」と思うような魅力在るイエイ、ターに成ることである。

イエイ、ターは人生経験が多い分期待される役割も大きい。老入会活動を通じて明らかになったことはイエイ、ターは潜在能力の宝庫であるということである。機会さえ与えればそれらが顕在化する。要するに、やれば出来るということ、したがってイエイ、ターを

活用する社会的仕組みを創ることが必要なのだ。村のイエイ、ターは社会的な役割を演じる人というイメージをアピールするために自画像を描いた。そこには明日のコミュニティ発展に向けて2つの役割－文化伝承と次世代育成－という2つの目を入れ、自らの社会的役割を強くアピールした。

〔参考〕 老人会活動は UNV や UNESCO により下記の通り報じられている。

Nobuo Endo, *Socio-cultural Development Through Intergenerational Links*, MUSEUM International, Angkor, a living museum, UNESCO, May 2002, 213-214, pp. 64-68.

Written by Fabienne Copin, *International Year of Volunteers 2001, UNV Project in Cambodia*, www.iyv2001.org, Ageing Conference: Nobuo, the UN works for people of all ages: Nobuo builds bridges <http://www.un.org/works/ageing/endo.html>

国連ボランティア計画2001年年次報告 <http://www.unv.or.jp/pp.16>.